

利尻産コテングコウモリに付着していた植物の種子

佐藤雅彦

〒097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志 利尻町立博物館

Seeds Found on Ussuri Tube-nosed Bat from Rishiri Island

Masahiko SARO

Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

Abstract. Several seeds were found on the bodies of two Ussuri tube-nosed bats, *Murina ussuriensis*, captured on Rishiri Island, northern Hokkaido, between 2003 and 2015. All of the seeds were identified as Japanese spikenard (= udo), *Aralia cordata* (Araliaceae, Apiales). Although there seem to be few occasions of their direct contact, attachment through droppings by animals (bird, mammal), which feed on berries of *Aralia*, is suspected.

コテングコウモリ *Murina ussuriensis* は道北地方のほぼ全域に渡って分布する昆虫食の小型コウモリで、その特徴的な鼻管と茶褐色の体毛で覆われた尾膜により識別される。利尻島では筆者により2003年から実施されている森林内での調査では、のべ99個体のコテングコウモリが捕獲され、標識装着や外部寄生虫などの探索が行われてきた。体毛中や皮膚上に潜むクモバエやツツガムシなどを見つけるために、外部寄生虫の探索は体全体を丹念に見ることで行われるが、寄生虫以外にもコウモリに付着しているものが稀に発見されることがあった。そのうち、2009年および2015年に捕獲されたコテングコウモリの2個体から、植物の種子と思われるものが見つかったので、ここに報告する。なお、種子の同定では百原新氏（千葉大学大学院園芸学研究所）にお世話になった。ご協力に心から感謝申し上げます。

種子が見つかったコテングコウモリはいずれもメス個体で、標識番号EZ0036は2009年9月21日に利尻富士町鬼脇で、EZ0142は2015年9月8日

に利尻富士町鴛泊にて捕獲された個体であった。前者は乳房に授乳の痕跡と体毛密度が低い下腹部が確認され、繁殖を行った成獣個体と想像された。一方後者は指骨の骨化具合から幼獣と判断された。両個体の体に付着していた種子（図1）は、柑橘類の液果のひとふさのような形をしており、黄白色を呈し、長さ1.90～2.35 mm、幅1.25～1.30 mmであった。付着部位と個数は、EZ0036は腹部に2個、EZ0142は背中および尾膜などに4個が見られた（図2）。これらの種子はいずれも腐敗などが進



Fig. 1. Attached seeds on the bat (EZ0142). Scale 3 mm.



Figures 2-3. Seeds of *Aralia cordata*. 2: A seed found on the body of *Murina ussuriensis* (EZ0142), 3: Seeds on a leaf of *A. cordata*.

んでおらず、種皮が固い状態のままで付着しており、ピンセットで容易にはさむことができた。しかし、コウモリの体毛にしっかりと固着されているようで、体毛を抜かないように注意を払いながら採集する必要があった。採集された種子は70%エタノールの液浸標本として持ち帰った。サンプルの同定および計測は実体顕微鏡下で行われ、これらの種子は百原新氏によってウド *Aralia cordata* と同定された。

利尻島のウドは、山菜としても鳥民に日常的に食されており、決して珍しい植物ではないが、ウドの種子は液果によって覆われており、野外では種子自体を直接見ることは決して多くない。葉の上に液果が落ち、破れた液果から種子が飛び出している状況も見られるが(図3)、筆者が観察したウドの葉上の例では種子自体に粘着性は既に残っておらず、指で触れば簡単に地表に落ちた。一方、野外から採取したウドの液果から種子を取り出し、ティッシュペーパー上に放置しておくとも種子はペーパー上に固着され、果汁などがなんらかの粘着効果を持っていることも確認された。しかし、一般的に遮蔽物の中を好んでねぐらとするコウモリが、花茎から落ちた液果や葉上などに裸出して落下している種子と密接に接触するような状況は想像しがたい。一方、ウドの液果は、哺乳類(荒井ほか, 2003)や鳥類(上, 1919)によって餌として食べられ、種子分散が行

われていることが知られている。そのため、ウドの種子を含んだ粘着性をもった鳥類などの糞が、コウモリの生活圏となんらかの状況で重複し、コウモリに接触・付着した可能性も考えられた。

これまで筆者は利尻島で5種のコウモリの捕獲調査にたずさわってきたが、体毛上に植物の種子が見つかったのはこの2例のみであり、いずれもコテングコウモリとウドに限られている。コテングコウモリは様々な環境を利用していることが知られており(平川, 2007)、彼らの習性がウドの種子付着と密接に関係しているかどうか、今後も、体表上の付着物の調査などを続けていくことで検証していく必要がある。

参考文献

- 荒井秋晴・足立高行・桑原佳子・吉田希代子, 2003. 久住高原におけるテン *Martes melampus* の食性. 哺乳類科学, 43(1): 19-28.
- 平川浩文, 2007. コテングコウモリ (*Murina ussuriensis*) の夏季におけるねぐら利用. 東洋蝙蝠研究所研究所紀要, (6): 1-7.
- 上 泰治, 1919. 大分縣八坂地方の鳥類. 2(8): 210-214.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2004. 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会. 667pp.